

# 暖かい部屋

綾乃

寒い部屋、というのはそれだけで気が滅入るものだ。

深夜。ぼちぼちとガラケーでメールを打ちながら、エアコンを睨む。

それは、先週壊れてしまったままだった。修理をするお金は、今はない。給料日まで、あと六日

。

ふ、と、エアコンが壊れた時を思い出す。

「ユウコ、リモコンの電池切れたかも」

同居人のハルが深刻な顔で私を振り返った。

リモコンの電池を入れ換えても、振ってみても、叩いてみても、電源はつかなかった。

.....同居人、と言ったが、今は、この部屋を出ている。仕事などで一時的に出ている訳ではなく、寒くないどこかの部屋に、私でない誰かの家に、ここから逃げ出して、生活している。

もちろん、寒いのが耐えられなくて出ていったわけではない。喧嘩をしたのだ。.....寒い部屋は、気が滅入るから。

「ハルもやりなさいよ」

「先週やった」

「当番制のはずでしょ？」

そう、もちろん、下らない理由。「私が仕事で遅くなるときくらい、洗濯物取り込んでくれたっていいじゃない」。

ハルは、壊滅的に家事のできないひとだったが、洗濯物くらい、小学生だって取り込める。

一度、機嫌の良いときに進んでやってくれたことがある。.....その時は、バスタオルを少し引きずっていたけれど、ハルが背が低いことを気にしているのを知っているため、何も言わなかった。

.....おかしいな。正直、ハルは家事をやらずにいた方が、面倒が増えない気がしてきた。

いや、私だって、同居人が出て行って丸二日も経てば、その人に対する苛立ちなんて消えている。怒ってはいない。でも、「帰ってきなよ」なんて、連絡できない。

考えつつ打っているメールは、私より先にスマートフォンに替えた母宛て。

「仕送りお願い致します。」

ひどい娘である。でも、背に腹はかえられない。そう、凍死する一步手前だ。

少しふざけた文章で、自分の気分をあげようとしているのだな、と、自ら推測した。

えい、と送信ボタンを押す。

返信は、ものの三十秒で返ってきた。

「お断りいたします」

最後に付けられた絵文字が、「なんちゃってね、嘘だよ」という顔をしていた(これは願望でもある)。

翌日、仕事の休憩中に銀行に行くと、残高がゼロひとつ増えていた。元のそれがいくらだったか

は秘密にしておきたいところだ。

意気揚々とそれを全額引き出し、仕事に戻る。

「あれ一、一村さん、午前中よりテンション高いですね？」

後輩の緑ちゃんが「部長のお土産です」と不味そうな菓子を私のデスクに置きながら顔を見つめた。

「ありがと。……うん、臨時収入」

「なるほどです」

緑ちゃんかわいい。素直で馬鹿で、どうでもいい話はどうでも良さそうに流す。ハルはというと、どうでもいい話しかしない。……本人と喧嘩をしているというのに、私が考えるのはハルのことばかりだ。

その日のうちに業者に連絡し、修理の日を決めた。給料日のあと、である。母からの振り込みは「臨時収入」として、明日、ありがたく緑ちゃんとのランチ(人気が下火のお店のフレンチトースト)にかえさせていただくことにした。

そして私はまた、ガラケーの画面を見つめている。

母へ、ではない。臨時収入のお礼は、引き出しの後すぐ、長文(私にしては、であるが)で送った。

宛名欄には、「柚木春奈」の名前。

「リモコンの電池が原因ではなく、本体のコンセントが抜けていました」。

送信。さて、返事は来るか。彼女は、この部屋へ帰って来るか。

修理の日まで、あと八日。



寒くない部屋、というのは、ぬくい。

当たり前のことである。その当たり前に気づく、愛ちゃんの部屋。

「せんぱーい、何か飲みます？」

家主である後輩が、マグカップをかざす。

「マグカップより、グラスで」

「人んち来てお酒の催促ですかぁ？」

「ぐいっといくのより、こうね、ちびりちびりと」

「ありませんよ。コンビニにでも行ってきてください」

愛ちゃんち、部屋はぬくい、家主冷たし。春奈心の一句(字余り)。

「ココアでいいや…」

「太りますよ、モデルなのに。ジンジャーティーにしましょう」

「ココアくらい飲ませてよ。ジンジャーティーって不味いじゃん。そして私は太らないんだって」

マグカップが鈍器に変わりそうな愛ちゃんの顔をユウコと重ねる。モデルのくせに、愛ちゃんは

ユウコよりかわいくないなあ。思ったことが口から出たらしく、近くにあったクッションを投げられた(その弾みで、ジンジャーティーが少しティーポットから跳ねた)。

「そのかわいいユウコさんからじゃないですか」

「何が？」

「...先輩寝てましたね。さっき、ケータイ鳴ったじゃないですか」

「えっ、うそ」

記憶にない。やはり寝ていたのだろう。ケータイを開くと、二件のメール。

これはきっと、

「ハル、早く帰ってきて」

「どこにいるの？ さみしい」

というユウコからのかわいいメール。な、訳がない。

期待せずメール画面を開く。予想は、半分...の、半分、当たった。一件目は事務所からの仕事に関するメール。二件目は、「一村邑子」から。

「リモコンの電池が原因ではなく、本体のコンセントが抜けていました」。

これは、「早く帰ってきて」という意味だろうか。そうに違いない。私は緩む顔を愛ちゃんから隠すためこたつに潜って、返信を書いた。



ハルからの返信。

「私だけ暖かい部屋に逃げてしまい、本当に申し訳なく思っている」。

的外れな文面にげんなりするが、私はちらりと玄関の扉へ目を向ける。

「.....ハルが帰ってきて、リモコン直ってないって知ったら」

また出ていくかな。

否、部屋が寒いから出ていったのではなく、私と喧嘩したから出ていったのだ。そう、自己中心的だから出ていったのだ。

そう思ったら再び苛立ってきて、大きな音を出してケータイを閉じた。

「ユウコ！ ただいま」

さっきまで視線を送っていた場所から、聞きなれた、そして懐かしいその声がある。

「ハル」

「ただいま。ごめんね」

靴を脱ぎ、私の座っているソファへ近寄ってくる。

「.....」

仲直りの、感動的な瞬間！

ではない。

私は今、苛立っているのだ。

「.....ハル」

「……あれ？ まだ怒ってるの？ なんで……あれ？」

「謝れよ」

「えっ」

「謝りなさいよ」

苛立ちを顔に出すと、ハルは、がらりと表情を変えた。

「何について？」

冷たい顔で聞き返してくる。

「家事をしないこと」

「それは謝ったじゃん」

「謝ってないわよ」

「……寒くない？ この部屋」

「寒いわよ」

ハルは、エアコンのコンセントが刺さっているのを見てから、リモコンに手を伸ばした。

ピピッ。

という音はしなかった。

「……壊れてるじゃん！」

「壊れてるわよ」

「こんな寒い部屋で何してるわけ！？ 風邪引くよ！」

「ブランケットかけてる」

「……帰ってきて欲しくて嘘ついたの？」

正直に言えば、そうだった。あのメールを才送った時は。今は、こんな女帰ってこなきゃ良かったのに、とさえ思う。

「八日」

「え？」

「修理の日。八日後」

「あ、そうなんだ」

話を逸らす。ハルはバカだから、もうあの冷たい表情は消えている。私を心配しているその美しい顔を見て、少し、ほんの少しだけ苛立ちがやわらぐ。

けれど、ハルのせいで苛立った心はハルの顔では癒されず、思い出すのは財布の中の札束。諭吉が一枚、諭吉が二枚。

「……ユウコ、こんな寒い部屋でそのまま眠ったら死ぬよ」

はっと目を開く。諭吉のリラクゼーション効果をなめていた。

「ごめん」

再びはっとする。

一度謝ってしまったら、……もしかしたら諭吉効果なのかもしれないが、……ハルに笑顔を向けることができた。

「ごめんね。暖かい部屋に逃げて、いいよ」

「何言ってるの？ ユウコー人だけ残していけるわけないでしょ」  
「……ちょっと前に流行った映画みたいなこと言いやがって……」  
「口が悪いよ、ユウコ」  
ハルは隣に座って、ブランケットをかけ、私の肩を抱いた。  
「エアコンの修理の日まで、あと八日」  
「……辛いな」  
さっきまでより、少しだけ、暖かい。



八日後。  
暖かい部屋で、私たちは決心した。  
結婚しよう。  
ではない。  
「スマホ買おう」  
私の両親は他界していて、ユウコのうちはお母様一人、私たちの関係に反対していない。  
そんなお母様に「いい加減スマホにしなさいよ」と上から目線で言われたので、私たちは、ショップへ出向いた。  
もちろん、同じ機種で、色違い。  
お互い分からないことがあったら教え合えるからだ。ユウコはお揃いという恋人文化があまり好きではないタイプだが、こういうところでは許してくれる。  
それからは、  
「あれ、ケータイどこだ」  
「テーブルにあるじゃない」  
「ああ、そうだった、これでかいリモコンかと思った」  
もちろん照れ隠しで、スマートフォンはリモコンには似ていない。  
「ハル、洗濯物干しておいて」  
「はい」  
一度氷のようだったこの部屋と心は、エアコンのおかげで暖まったようで、私も家事をするように……なった、といえば、なった。  
ユウコに言わせれば「ちゃんとやって！」「当番！」「引きずらないで！」。  
また逃げ出したくなる心は、ユウコのかわいいかわいい顔を見れば、どこかへ消えてしまう。  
「ユウコ、ジンジャーティーを飲もう」  
マグカップをふたつ買ってきた。赤と白の、色違い。ユウコは嫌な顔をしたが、頷いた。  
暖かい部屋と言うのは、それだけで癒されるものだから。